

戦前の中国通記者・横田実について

—国民革命下の広東時代を中心に—

本庄 比佐子

1

東洋文庫近代中国研究委員会が資料の収集を始めてから三十数年になる。その初期に比較的まとまって受け入れたのが、横田実（1894—1975）旧蔵の資料である。それには中国文の図書・雑誌370点、中国新聞の切抜き80余冊、そして大衆運動の伝単類が含まれていた。その大部分が1920年代から30年代（盧溝橋事変以前）のもので、また中国国民党関係の文献が多いのが特徴であろう。本誌に解題と記事目録が掲載されている『中国国民党周刊』もその一つであるが、これらの図書・雑誌については目録に掲載され、利用に供せられて既に久しいので、ここでは詳細を省略する。ただ、伝単類（マイクロフィルムにまとめてある）と新聞切抜きは内容目録が作成されていないので、簡単にふれておくと、伝単類としては、1924—26年における反帝反軍閥闘争関係のもの、第二次全国労働大会や国民党一全大会関係のもの、1936年の北平学生連合会郭清死難追悼に関するもの、1933年の国民党本部党務報告、などがある。新聞切抜きには、1924—27年の広東労働運動、1926—27年の左右派国民党、1927年4.12事件～28年の南京政府、1927年国共分裂～28年の中共情勢、1927—28年の紅槍会・大刀会、国民党4期5中全会（1934）と5全大会（1935）、剿共軍事、西安事件、冀東政府、1935—37年の西南問題・中央政治・華北経済、1936—37年の日支交渉、などがあり、さらに、1945年8月～46年3月のものもある。このように切抜きは1920—30年代の重要事項をかなりカバーしているのであるが、記事の掲載紙名を記していないものが多く、資料としての利用価値を減じているのが残念である。

ところで、近代中国研究委員会では旧蔵者の名を冠してコレクションとする資料整理の方法を採っていない。従って、これ迄にこれら横田旧蔵図書を利用した多数の人々にその名を知られることもなかったであろう。表紙に「横田」の印が押されている図書もあるが、その印影はかなり薄くなっている。ただ、新聞切抜きと伝単類は特定の主題毎にまとめた整理が困難なために、両者を総称して「横田コレクション」と呼んできた。しかし、「横田とはどんな人か」という質問には、「戦前に記者であった」と答えるに止まり、横田実について何ら詳らかにすることなく今日に至った。

横田実は、戦前の日本を代表する通信社であった同盟通信の北京支局長、東亜部長などを歴任した人物で、平凡社『大人名辞典・現代』(1979)には「戦前屈指の中国通記者として鳴らしたほか、印譜の収集家として有名」とある。同じ同盟通信の上海支局長であった松本重治には『上海時代—ジャーナリストの回想』(中央公論社、1974—75)の著書があって、われわれもかれの活躍を知ることができる。一方、横田には中国特派員としての回想録はないようで、かれの遺した著作は雑誌などに発表した文章は別にして、管見の限りでは、遺著となった『中国印譜解題—漢南書庫』(二玄社、1976)のみである。従って、かれが中国にどのように関わっていたのかを知るのも容易ではない。長年の怠慢を多少なりとも埋めるべく最近になってようやく着手した調査は未だ十分ではない。だが、本誌に横田旧蔵書から『中国国民党周刊』が紹介されることでもあるので、その時代の横田について、これまでに判明した限りでの紹介文を草することにした次第である。

2

1894(明治27)年、栃木県に生まれる(以下、断りのない限り、履歴については、『中国印譜解題』巻末の「著者略歴」による)。1918(大正7)年、その動機はわからないが、日本大学を中退して中国へ渡った。3年後の21年、大連に本社をおく日文新聞『遼東新報』の北京特派員になって¹⁾、記者生活の第一歩を踏み出した。当時の中国では、一方で、北京政府を握る北洋軍閥は分裂・抗争を繰り返しており、五四運動で打

撃を受けた安徽派政権に対して直隸派が抬頭して安直戦争、第1次奉直戦争の勃発となり、各省における軍閥の割拠が続いていた。だが他方で、1年余りにわたって各地で展開された五四運動は終息したとはいえ、社会の各層が参加した運動を通して、反帝国主義と反軍閥の意識をもった民衆と社会勢力が育っていた。このような情勢の下で横田の特派員としての活動が如何なるものであったかは明らかではない。だが、23年10月には遼東新報社を辞め、その後おそくとも年末、あるいは翌24年初までに広州へ移っている²⁾。軍閥支配下の北京とは異なって新しい中国の胎動を感じさせる広東に惹かれてのことだろうか。そして8月、日本電報通信社に入社、そのまま同地の支局勤務となったようで、「著者略歴」は「日本電報通信社広東支局入社」と記している。

日本電報通信社は日清・日露戦争後の日本の対外発展を背景に1907年に設立され、のち36(昭和11)年にその通信部が新聞連合社と合併して同盟通信社となるまで、略称「電通」の名は日本を代表する通信社の一つとして知られていた(その後は広告部がこの略称で知られ、現在に至っている)³⁾。横田が入社した24年には既に、北京をはじめ大連、上海、天津、漢口、広州、青島などの各都市に支局が開設されていた⁴⁾。広東支局は22年に設けられたが、国民政府が武漢へ遷った直後の27年2月には廃止されるので⁵⁾、まさに国民革命の展開に対応した支局の存在であったのであろう。横田は支局主任を務めていたようだが⁶⁾、広東勤務は僅か1年で北京支局に転任する。かれが同地を去るのは、25年6月23日の沙基事件から2カ月程のちであったというから⁷⁾、8月末頃であろうか。

この広東時代、電通に入るまでの数カ月間、横田はまったくフリーであったのか或いはどこかに所属していたのか、また電通入社後どのような記事を発信したのか、などについては分かっていない。ただ、北京に移ってから1年程の間に、広東での見聞も交えて同地の情勢を論じた、以下に掲げる文章を、藤原謙兄の編集発行する『北京週報』に発表している。すなわち、

- ①「広東赤化の過程と現状」1～4(第184、186-188号、1925年11-12月)
- ②「国民党第二期執行委員の解剖」(第195号、1926年2月)
- ③「広東農民運動の黎明」(第196号、同上)

- ④「国民党第二次全国大会」1 (第200号, 1926年3月)
 ⑤「六月二十三日の思ひ出」(第214号, 1926年6月)
 ⑥「広東罷業の中心機関糾察隊」上, 下 (第228, 229号, 1926年10月)
 である⁸⁾。これらの文章から, 筆者の目にとまった幾つかの事柄を紹介しよう。

先にもふれたように, 横田が広州を離れるとき, 同地では, 上海に起こった5・30運動に呼応した大衆のデモに対するイギリス官憲の発砲事件(沙基事件)に抗議して, 大規模な反英ボイコットの闘争が続いていた。香港および沙面租界から引き上げた中国人労働者のストは全面的な対英経済絶交運動に発展し, 26年まで続くのであったが, そこで香港・沙面のほぼ完全な封鎖に大きな役割を果たしたのが労働者の糾察隊であった。⑥はこれを取り上げたものである。糾察隊編制法全文を訳出したのち, 組織体制について説明し, さらに具体的事例をあげて各所に配された同隊の活躍振りを述べている。糾察隊による取締りは厳重で「極端なる暴威が振はれた」が, これについて, 些かの妥協点も見出し得ない反英闘争に「斯かる暴威は蓋し己む無きものがあつたであらう」と言い(上, 11頁), イギリス側がこれの中傷宣伝したのは止むを得ないが, 「罷工の意義を闡明にし如実に国際資本家の窮境を曝け出したのは一に糾察隊の活躍に因ると断じ得られる」とまで述べて(下, 26頁), 本闘争に理解を示しているのは注目される。

横田自身としては, 沙基事件の当日, 「間一髪に死を免れた」体験をしている。広東支局のあった沙面租界⁹⁾の, デモ隊の「通過する沙基道路とはホンの濠一つの, 目鼻のハッキリ判る程の近さ」の所で, 延々と続くデモを眺めていた時, 突然起こった銃撃戦に身を曝すことになった前後の緊迫した状況を⑤は語っている(10頁)。沙面側からの記録として興味深い。

ところで, このような広東を, かれは, 「主義者の理想郷であり労働者の天下」であり, 「社会主義運動の火元」であるとみていた(①-1, 27頁)。その「直接因」をなしたのが24年1月に開催された国民党全大会であるとして, これを詳しく紹介したのが①である。まず, 大会に至る状況として国共合作を成立させた二つの要因をあげる。一つは, ソ連と中共の国民党への働きかけで, 「中国共産党の国民党抱込み運動が

巧みに奏功した」ことにあり, 同時に, その二として, 22年の香港海員スト以来の「労働運動の急激な発達から民衆の自覚が著しく増進して来た」ことへの対応を国民党が必要としたことを指摘している。こうして, 「全支の思想運動に一転期を劃し」, 「従来の国民党の面目を一新する劃時代的内容をもった全大会となった(同上, 28-29頁)。大会の内容としては, 宣言, 人事, 組織の面から説明しているが, そのうち宣言原案の修正について述べた部分が珍しい。一般に, 宣言案が審査委員会で検討されたこと, 本大会の基調である国共合作路線に右派の抵抗があったことには言及されるが, 原案の修正についてはほとんど触れられていない。翌27年に発表した文章の中で横田は, これを「全然未発表に了った事実」と述べている¹⁰⁾。かれは何か特別な情報ルートを持っていたのであろうか。横田によれば, 審査委員会で激論が交わされ, その結果, 右派の主張を入れて原案の2カ所が修正されたのであった。すなわち, 宣言の第2節「国民党の主義」中の民生主義を説いた部分から, 地主の土地および, 商売をしたり官吏であつて自ら耕作せず小作料や地代を徴収する者の土地は国有とする, との一節, 第3節「国民党の政綱」中の対内政策第11項(第10項か)より, その後半の, 地主と小作人の平等を謀ると述べた部分, これら2カ所が削除されたという。この削除された部分について横田は, これを原案に挿入したのは「労働露国心酔者の仕業であらう」としている(①-2, 30頁)。

先に述べたように当時すでに広州にいた横田は, 連日, 大会を傍聴した¹¹⁾。従つて本文の所々でかれの目に映じた大会場の様子や印象をも交えて語っているので, 少し紹介しておこう。大会第1日目, 主席団が選出された際, その中に李大釗が入っているのを見て, 「極左傾的思想家として著名ではあつたが」, 「国民党員として曾つて其名を聞かなかつた」ので, 「当初甚だ奇異の感を抱いた」という。だが, 壇上に胡漢民ら党の元老たちと「椅子を並べて漆黒の長髪に強度の眼鏡を光らせた, 如何にも学者型の李氏がすべてに控目らしい姿を見せた事は」, 国共の「合作運動を最も如実に物語つて愈々大会の重要さを想はせ」られた, という(同上, 29-30頁)。中央執行委員についても, 「名もなき青年, 共産主義者が選任されて, 一躍胡漢民, 汪兆銘, 張継等と名を連ぬるといふ奇観を呈」した, と語る。この大会で候補執行委員に選ばれた瞿秋白

については、後年、『中国印譜解題』中の「瞿秋白筆名印譜」の項で、まだ代表ではなかった瞿を毎日のように記者席で見かけたと、回想している¹²⁾。ところで、この中央執行委員の選挙にあたって、予め準備された名簿を胡漢民は北京語と広東語で2度ずつ読み上げ、それでも、新人が多かったせいか、たびたび文字の説明を求める声があがった、と語っている(同上, 31頁)。

一全大会の決議によって設立され、その後の国民革命の進展に大きな役割を果たしたのが黄埔軍官学校である。全国各地から応募してきた入学志願者を広州と上海の2カ所に集めて、試験が行なわれた。横田は、24年3月下旬、広州で行なわれた試験を当日許可をもらって参観している。「すべての情実を廃して珍らしくも極めて嚴重な審査」で、試験科目に国文、歴史、地理ばかりか代数まであるのを見て、「日本人の先入観念からする、御お座なり式な、いい加減なものではなかった」というのは、率直な感想であろう。6月の開校式には参観を許されなかった。開校以後に参観した時の報告がある。門を入ると到る所に書かれた革命のスローガンが目に入るが、兵営内の整然とした様子には感嘆の声をあげている(④-4, 31頁)。また、制服、付属品、主要武器などがすべて日本製であり(武器はソ連から贈られたもの)、さらに教官の主な人々が日本の士官学校出身であるために、銃の持ち方から敬礼の仕方まで日本式であるのを、面白いと見ている(同上, 30頁)。

一全大会からちょうど2年後の26年1月、同じく広州で二全大会が開かれた。この間に孫文と廖仲愷の死があり、それらは国民党内の左右対立を表面化させ、大会直前の25年11月には右派が公然と分派行動にでた(西山会議)。横田はすでに北京に移っていたが、国民党の行方を見続けていて、こうした状況の下で二全大会は「最左翼派の非常な努力に依って急遽召集された」にもかかわらず、「予想外の成功」を収めたと評価する文章を書いている(④, 25-26頁)。大会代表の選出母体の広範さの点で一全大会より劣っていて、「代表駆り集めの観を免れない」が(26頁)、各種の決議案は過去2年間の運動の発展とそれに基づく今後の方向を明示しており、「誇るべき収穫」であるとする。そのなかで労働運動、農民運動等に商人の運動を加えた点を、労農至上主義ではないことを認めたこととして特記に値するという(27頁)。しかし何よりも、今大会の

最大の特徴とみているのは婦人の進出で、16名という婦人代表の数は、「支那に於ける革命運動史上の一つの新記録であると共に婦人運動に一展期を劃したものと」、高く評価する(26-27頁)。新中央執行委員についても同様で、婦人委員の選出を最大の特徴とし、しかも「その人々が極めて有力者であり実力を持ち、「実質からして聊かも男子連にヒケを取るものでな」といって賛辞を呈し(②, 25-26頁)、かなりの驚きを持って見ていることが窺える。

以上、横田実が自身の広州駐在時期の見聞に基づきつつ、国民党と広東の状況を記した文章を見てきた。冒頭部分で紹介した新聞の切抜きは、これらの執筆にあたって材料になっていよう。『中国国民党周刊』も大部分はこの時期に入手したものである。しかし、かれの関心は単に国民党にあったのではなく、中国の革命運動にあったのであり、その一方の担い手であった共産党にも注目していたことは、上記の紹介からも明らかであろう。27年以降、横田は日本の論壇に登場して中共を論ずる文章を発表することになる。それらの検討は稿を改めて行ないたいと思う。

註

- 1) 外務省情報部『支那(附香港西伯利)ニ於ケル新聞及通信ニ関スル調査』(大正11年6月15日)には、北京に駐在する日本の特派員・通信員として、「遼東新報社 横田実」の記載がある(52頁)。
- 2) 横田実「支那共産党の内情」(『外交時報』552号, 1927年12月)に、国民党一全大会が1924年1月20日から開かれた時、「筆者は恰も此時広東に居住して居た」と述べている(78頁)。
- 3) 『電通通信史——日本電報通信社「通信部」の記録』(本書刊行会編・刊, 1976), 2-3頁, 322頁。
- 4) 同上, 136-144頁。
- 5) 同上, 144頁。
- 6) 同上。
- 7) 横田実「六月二十三日の思ひ出」(『北京週報』214号, 1926年6月), 17頁。
- 8) ほかに次の2編がある。

「内蒙赤化の一階梯」(192号, 1926年1月)

「総攻撃中の南口戦線を観る」(220号, 1926年8月)

なお、1925—28年の『北京週報』に「漠南生」のペンネームによる文章が数編あって、横田の号「漠南」との関連が考えられるが、藤原鎌兄夫人の記憶ではこれを『朝日新聞』特派員とする（小島麗逸『北京週報』（1922年1月～1930年9月）と藤原鎌兄『アジア経済』13巻12号、1972年、37頁）。ここでは保留にしておきたい。

- 9) 前掲『電通通信史』、144頁。
- 10) 前掲『支那共産党の内情』、78-79頁。
- 11) 同上、78頁。
- 12) 『中国印譜解題』、446頁。